

## 東京オリンピックと PC のルネッサンス



杉本 武司\*

昨年9月8日、2020年の東京オリンピック開催が決まり日本中が歓喜の渦に包まれましたが、私には50年前の出来事が、これからの時代に託す思いと二重写しになって、甦ってまいりました。

それは、昭和39年開催の東京オリンピックです。私たちの世代にとって、まるで「生涯忘れることができない記憶の室」に納められているかのようです。伝説となったバレーボールの東洋の魔女、金メダルは果たせなかったが銅メダルを得て日の丸を背負った男・円谷幸吉選手。このほかにも桜井孝雄（ボクシングバンタム級）、猪熊 功（柔道重量級）、遠藤幸吉（体操個人総合）、三宅義信（重量挙げ）等々が躍動する姿が、当時の映像のままに見事に蘇ってまいります。そして、日本選手の活躍は、大きな精神の高揚を覚える出来事でありました。

その時代はPC建設産業の興隆期でもありました。PC建協の前身のPC工業協会の発足は昭和30年で、その頃にはPC専門者の第一陣ともいべき会社が出揃いました。そして、オリンピックに間に合せようと東海道新幹線、首都高速道路、羽田モノレールなどが突貫工事で建設されました。インフラの整備に、先端技術だったPCの技術がどんどん導入されたのでした。

当時は、日本中の誰もが明日は今日より豊かで幸せな日が来ることを信じた元気な時代でした。今日、状況は大きく異なりますが、2020年のオリンピックを契機に、再びあの頃のような元気な時代の到来をと、そんな思いを抱かずにはいられません。

今日の建設産業は、若者にとって魅力的な産業とはとてもいえない状況です。若い技術者や技能者の減少が技術、技能の継承に大きな問題を投げかけています。そこで、このような状況を打破しようと全力で取り組んでいるのが、技能労働者の適正賃金水準の確保や社

会保険加入に向けての取り組みです。まずは技能者の世界からということで、PC建協ではPC工事業協会の皆さんと連携し、最大限の取組を行っております。

もちろん、この取組は技術者の世界にも及ばなくてはなりません。建設産業の経営資源の主体は施工に携わる、あるいはそれをサポートする技術者であります。経営者は技術者にこそ投資すべきなのであります。そして、明日に向けて夢のある仕事を用意することだと思えます。

今日、東日本大震災の復興事業の本格化に加えて、国土強靱化や既存インフラの長寿命化といった新たな国づくりの根幹をなす施策が推進されようとしています。これらを推進するのに大きな力を発揮するのがPCの技術だと考えています。かつてのような大規模プロジェクトの世界とは異なりますが、新たな技術フロンティアが広がっているのです。若者の皆さん！PCの世界に新しい夢を描いてみませんか。

若者と向き合うには私達も時代に合せた対応が必要です。かつてはバレーボールの大松監督のようにスパルタ式の指導がほとんどでした。しかし、昨夏の甲子園を制した前橋育英高校の荒井監督は、「けっして怒らず、やるべきことの根拠を示して自発的行動を促し、その積み重ねが進歩を生む」と話しておられます。まさに範とすべきではないでしょうか。

私達にとって「オリンピック」とは、希望であり、夢であり、誇りでありました。本稿では若い皆さんに、再びそんな気持ちを持ってもらえる時代がやってくることを、PC建設産業の復興（ルネッサンス）への願いと合わせて語らせていただきました。

なお、広報誌「PCプレス」第3号（26年新春号）は東京オリンピック特集としております。是非ともご一読をお願いし、稿を閉じます。

\* Takeshi SUGIMOTO：(一社)プレストレスト・コンクリート建設業協会 副会長（広報委員長）  
（株）ピーエス三菱 副社長